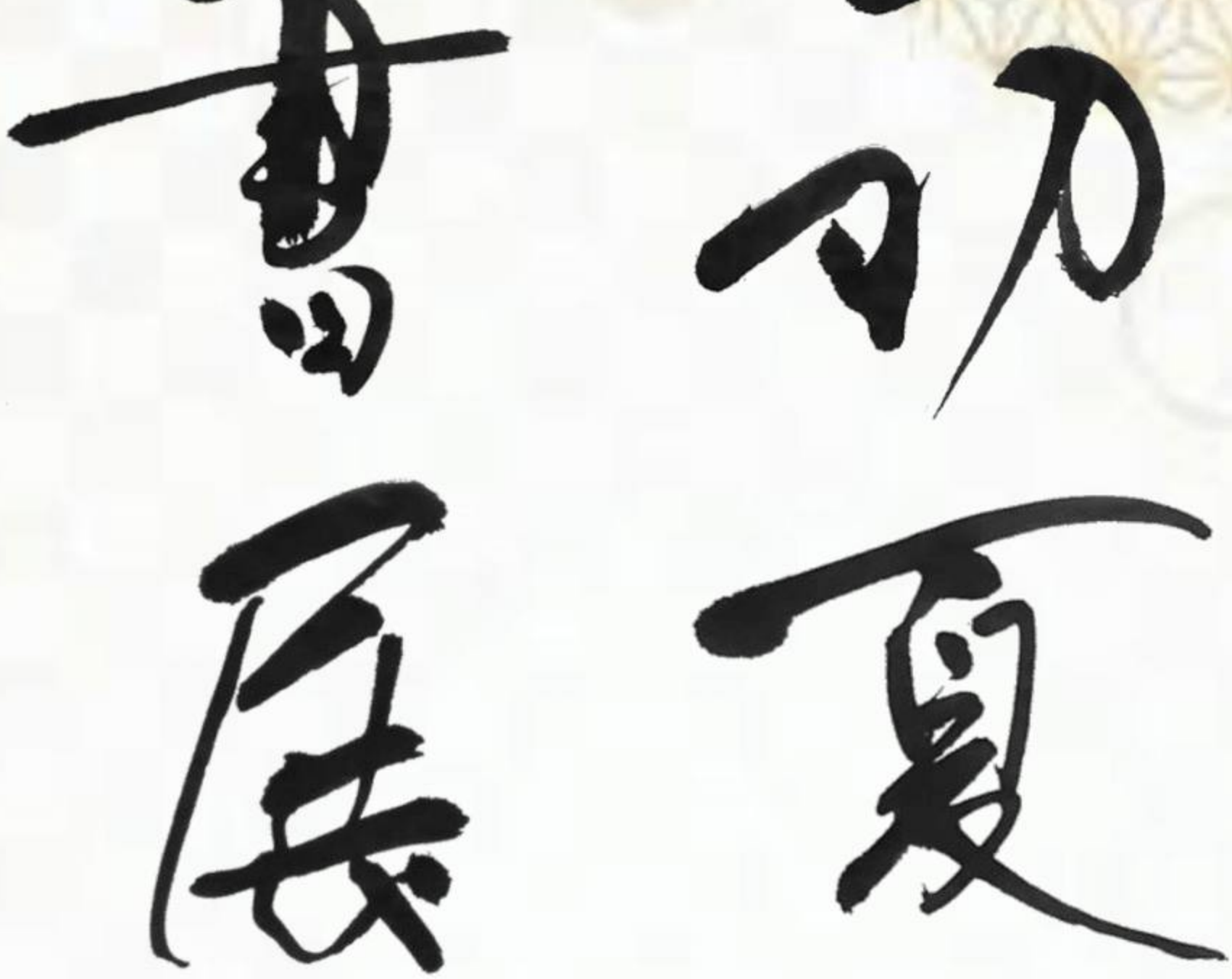
京都大学書道部



日時　六月十一日（土）、
十二日（日）
十～十七時

会場　建仁寺 西来院

巻頭に寄せて

京都大学書道部　部長　戸髙海

書道の展覧会。いつだってわくわくします。書を見ることが何よりも好きです。今回は書展パンフレットの巻頭言ということで、書を見ることについて思いつくままに書きました。

作品を通して作者の感覚や精神、時には思想を理解する。これが書を見る時に行っていることだと思います。作品を通してそれらを受け取るには、作者とどれだけ同じものを見たり、知ったり、感覚として持っているかという、共通の背景が必要です。特に中国の古典は時代も国も言葉も文化も違うので、共通の背景が少なく、最初はわからないと感じるものがあっても自然なことだと思います。

一つ感じることは、作品をどうみるかという価値判断のものさしは作品ごとに異なるということです。作品をわかるということは、その作品が提示するものさしを、自分の中に持つということだと思います。あるものは造形的な美しさ、あるものは精神を反映したものとして、あるものは文字の群体としての構築性、通して作者のものさしを共有しているといえます。新しい作品は新しいものさしを持ち込みます。書全体で、誰かが誰かに影響を受けながら、そのものさしを少しずつ拡大しています。これが書の芸術としての歴史的な側面だと思います。現代書壇の作品同士でさえ統一的な基準で見ることはできないと思うのです。

また、技術について。頭の内面をどれだけ形として実現できるかが技術なら、100%を紙に落とし込むことは不可能です。高い技術で書かれたものは頭の内面と外部化されたものが近いので意識されませんが、実は作品を見ているようでその先の内面を見て感動していると思うのです。それならば技術的に優れていないものでも、その先の景色を見て感動することができます。それどころか、神経を集中させて意に沿わない筆に必死に抵抗しようとするその気迫に心打たれることもあります。書は書家のものだけではありません。

これまでのことに共通して言えることは、書道も他の芸術と同様に、頭の中を残して共有できるように外部化している営みのような気がします。私が書に強く感じることは、その時の感情や空気が紙に閉じ込められているという感覚です。書は時間の経過が紙に刻み込まれるという性質が強いものだからかもしれません。自分の昔の作品を見た時に、その時に自分が感じていた不安や力強い決意といったものをいつでも思い出すことができます。それは写真よりもずっと高い精度だったりします。もちろん作品を通して他人の感覚が自分の中に入り込んできます。黄庭堅の書の実物を見た時に、その厳しい精神や緻密に書き上げられた気迫に圧倒されました。約千年も前の人と同じ感覚を共有できるのは素敵なことだと思います。

最後になりますが、こうして書展を無事開催できるのは顧問の成田健太郎先生と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとする多くの方々のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。また、寺本先生は今回の書展を持ちましてご退任されます。長い間ご指導頂き本当にありがとうございました。

本日ご来場頂いた皆様、初夏書展にお越しくださり誠にありがとうございます。どうぞ様々な作品をお楽しみください。

人の顔に美悪あるがごとし

成田　健太郎（京都大学大学院文学研究科准教授）

いつの世にも、少しでも自分の能力を高めようと日夜努力する人がいる一方で、そんな努力は徒労に過ぎないと冷笑してくる人はいたようで、二世紀中国の趙壱（ちょういつ）という人は「非草書」（草書を非難する）という文章を書いて、次のように言っています。

> およそ人はそれぞれ気質が異なり、体質もちがっている。心には疎と密があり、手には巧と拙がある。書の好醜は心と手によって決まるのであり、強いてそうすることができようか。例えば人の顔には美しいのとまずいのとがあるが、どうして真似をして相手と同じになることができよう。（二玄社『中国書論体系』第一巻・杉村邦彦訳）

たしかに、一理あるかもしれません。何枚も何枚も書き直して、自分ではまず良くなったと思っても、人に見せてみると、「どこが変わったの？」「なんだ一枚目の方が良かった」なんて言われてガッカリすること、よくあります。書の上手い下手は結局天性のもので、短い大学生活の間努力したところで、どうなるものでもないのだよ――趙壱のせせら笑いが聞こえてくるようです。

しかし、趙壱の答えが正しいとしたら、こうも言えるのではないでしょうか。書は、どこまでも率直に、書いた人本来の持ち前を映し出すのだ、と。もしそうであるならば、書というのはなかなか意義深いものであるようにも思えてきます。人の顔に美しいのとそうでないのがあり、取り替えることができないのはその通りですが、それはそれぞれに個性があるということでもあります。今回の書展でも、個性のあるいろいろな顔を楽しく拝見するとしましょう。

作品を創る

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

昭和四十年頃、私が大学生の時は、公募展や学生書道展では、明末清初の作家を臨書や倣書した作品が多く出品されていました。関東では、篆、隷、楷書の作品が多く、関西では、行、草書をを中心に勉強した作品を発表している人が多かったと思います。

私は、村上三島先生の門下の古谷蒼韻先生に師事していました。その当時、先生から、まずは体で筆を操ることを、体に覚えさせなさいと言われ、一回生の夏休みには、一万枚の古典臨書や展覧会用の古典集字の仕方、また、半紙で一枚仕上げる速度の制限等を決められて、古典臨書をしておりました。そして、基礎になる古典の王羲之を中心に、展覧会には、黄道周の倣書を出品していたのが、一回生の時で、二回生からは、趙之謙を元に、多字数の作品を書き始め、以来四十年余り作品を出品しておりました。その後、六十歳ごろから傅山を取り入れた作品を出品するようになり、現在に至っております。大学在学中の四年間は、ひと月に、半紙を二反（四千枚）、二尺八尺の作品を三反（二百枚）書くことを義務付けられ、展覧会や稽古に明け暮れていました。普段の稽古では、いつもの古典以外に色々な人々の古典を学び、用筆法を中心に、書き殴りました。

皆さんに言いたいのは、作品は、古典を学び、その特徴や用筆法を元として、創り出すものと思っております。京大書道部とは十七年余りの付き合いでしたが、無闇に感覚に走った作品を書くのではなく、古典を基礎に積み上げた技術力を創作に発揮してください。最後の二年近くは対面稽古ができなくて、大変申し訳なく思っております。今後、新しい先生とともに頑張ってください。長い間ありがとうございました。

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『遊魚動緑荷』……4
　　創作・『枕簟嫩涼』……4

二回生

淺雛穂乃花　臨書・『臨蘭亭序』……7
大林明日香　創作・『天上唯我独尊』……8
　　創作・『黄花香淡秋光老』……10
須田光太郎　臨書・『臨九成宮醴泉銘』……6
　　臨書・『新緑夏を告ぐ』……13
木下美優　臨書・『臨三体千字文』……14
木村隼翔　臨書・『臨源氏物語絵巻』……12
　　臨書・『臨孔子廟堂碑』……5
城本昌明　創作・『乾坤一擲』……6
二宮海椰　臨書・『臨真草千字文』……6
橋本充史　臨書・『臨顔真卿鹿脯帖』……15
渡辺紗英　臨書・『臨高野切第一種』……14

三回生

大西沙穂　創作・『逆夢』……8
岡雅博　創作・『百人一首　秋の二首』……12
倉橋あい　臨書・『滄海碧天』……5
素鴻（凌楡凱）　創作・『自作「懐才不遇詩」並序』……9

四回生

高石京花　創作・『或人、弓射る事を習ふに』……13
戸高海　創作・『蘇軾詩』……10
　　創作・『燃えさかる』（若山牧水の短歌）……14
乗杉玲壽　臨書・『臨皇甫誕碑』……7
　　創作・『古詩十九首』……17
乾未樹　臨書・『臨杜家立成雑書要略』……8
　　臨書・『臨風信帖』……7
近藤毅　創作・『般若心経』……5
鈴木翔子　臨書・『臨晋祠銘』……9
豊留まり　創作・『駱賓王「夏日遊山家同夏少府」』……9

修士一回生

柴田達哉　創作・『杜甫「絶句二首」其一』……11
渡部裕貴　臨書・『臨致希声吾英友尺牘』……10

修士二回生

市川拓真　創作・『日日是好日』……11
吉田凌祐　創作・『ＯＮＯＫＯＲＯ』……16

博士一回生

中村勇真　創作・『葉菌詩』……10

合作

戸高海・乗杉玲壽　（三回生）
　　創作・『七言詩軸』……13
乾未樹・近藤毅・関美乃・豊留まり　（四回生）
　　創作・『弱肉京食』……16
新入生合作　『無添　よしだ寿司　湯呑み』……17
全体合作　『架空看板』……18

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生



『遊魚動緑荷』

「遊漁（ゆうぎょ）緑荷（りょくか）を動（うご）かす　魚が池中に戯れ浮草を揺がす。」

明末清初の傅山を基に爽快に流してみました。



『枕簟嫩涼』

「枕簟嫩涼（ちんてんどんりょう）」宋（陸放翁）　夏のむし暑い時に涼を求めて高枕で寝る。」

清末の趙之謙を倣ねて、豪快かつ爽やかに仕上げました。

楷書作品

1

木村隼翔（二回生）　半切　臨書　『臨孔子廟堂碑』
「六辯夤奉上玄肅恭清廟宵衣昃食視膳」

お手柔らかにお願いします。



2

倉橋あい（三回生）　半切　臨書　『滄海碧天』
「中秋雲浄く滄海を出で　半夜露寒く碧天に當たる」

楽しいことが多い夏も好きですが、暑さと湿気に参るたびに、早く涼しい秋が始まってほしいと思ってしまうものですね。伸び伸びとした、涼しげな作品に仕上げました。



3

近藤毅（四回生）　写経サイズ　創作　『般若心経』
「摩訶般若波羅蜜多心経……」

細字を書く集中力が失われつつあります、高校生の時は余裕だったのに……



4

城本昌明（二回生）　半切　創作
「乾坤一擲」



乾坤一擲の大勝負、してみたいですね！

5

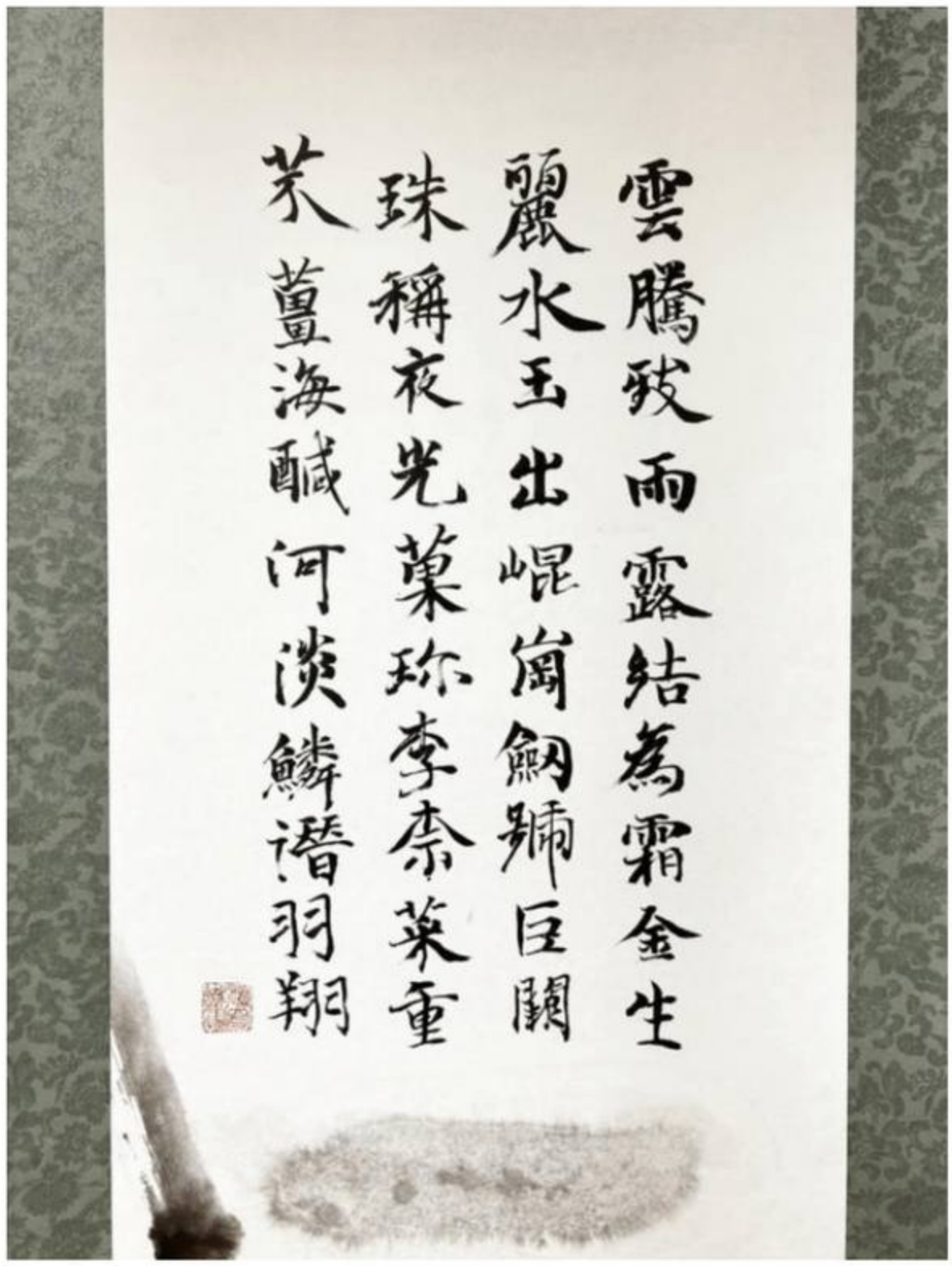
須田光太郎（二回生）　全紙　臨書
「冠山抗殿絶……」



法帖のもつ綺麗さと迫力を保って作品にするのにとても苦労しました。

6

二宮海椰（二回生）　半切　臨書　『臨真草千字文』
「雲騰致雨露結為霜」





水墨画に初挑戦しました。

行書作品



7

乘杉玲壽（三回生）　半切　臨書　『臨皇甫誕碑』

「詎待變柃朱藍恭孝為基寧取訓柃橋梓」

いつも草書ばかり出品しているのでたまには楷書をと思い制作しました。格調高い作品を目指しました。落款には「初心不可忘（初心忘るべからず）」と書いてあります。



8

淺雛穂乃花（二回生）　半切　臨書　『臨蘭亭序』

「永和九年　歳在癸丑　暮春之初　會于會稽山」

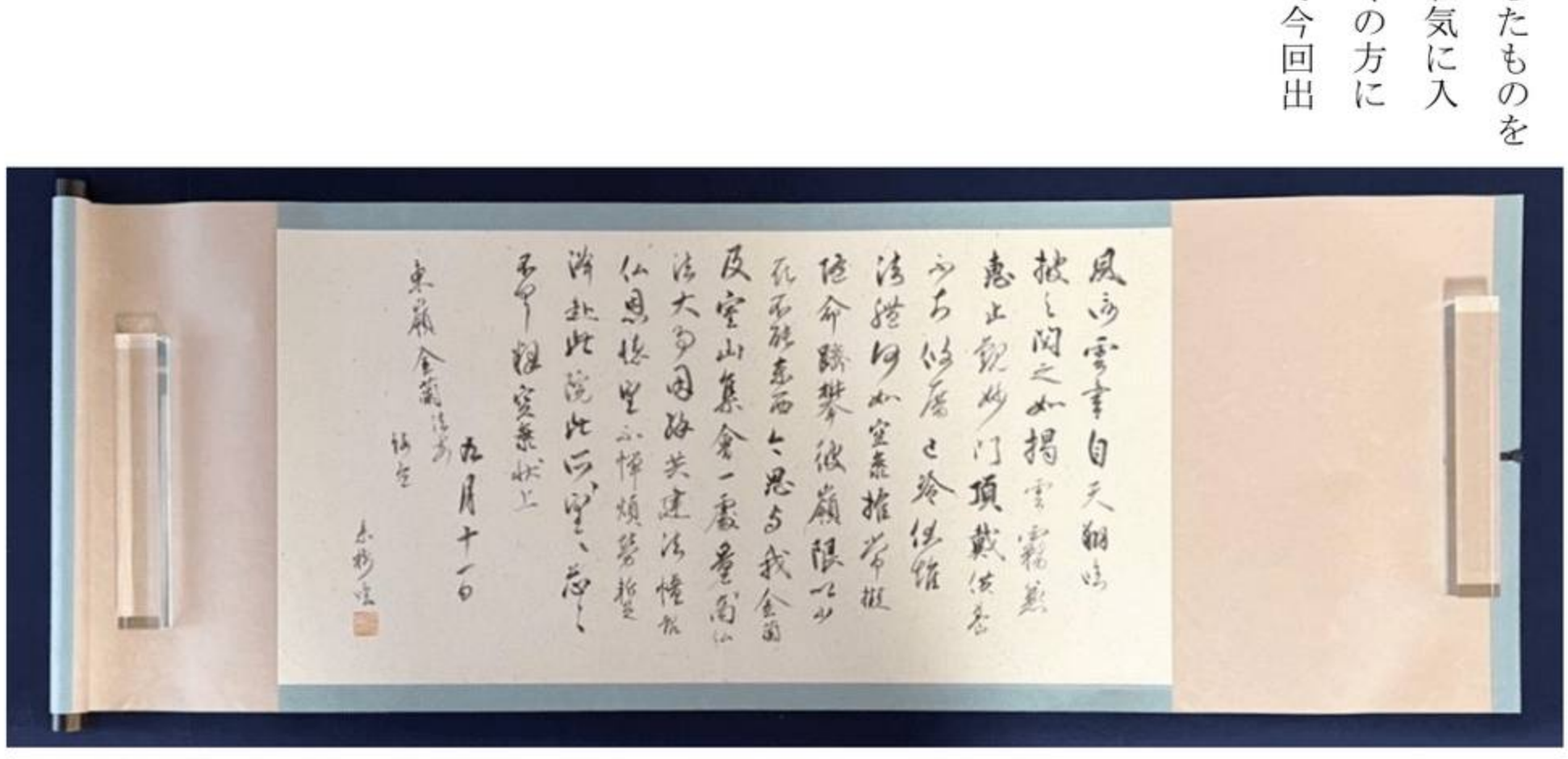
作品の特徴を捉えながら書くのが難しかったですが、楽しく取り組めました。

9

乾未樹（四回生）　半切横二分の一　臨書　『臨風信帖』

「風信雲書自天臨…」

昨年の旧帝展で出品したものを軸表装に直しました。お気に入り古典の一つなので多くの方に観てもらいたいと思って今回出しました。



10

乾未樹（四回生）　半切　臨書　『臨杜家立成雑書要略』

「静乱之威刀光照日敬承明旦即渉戒塗」

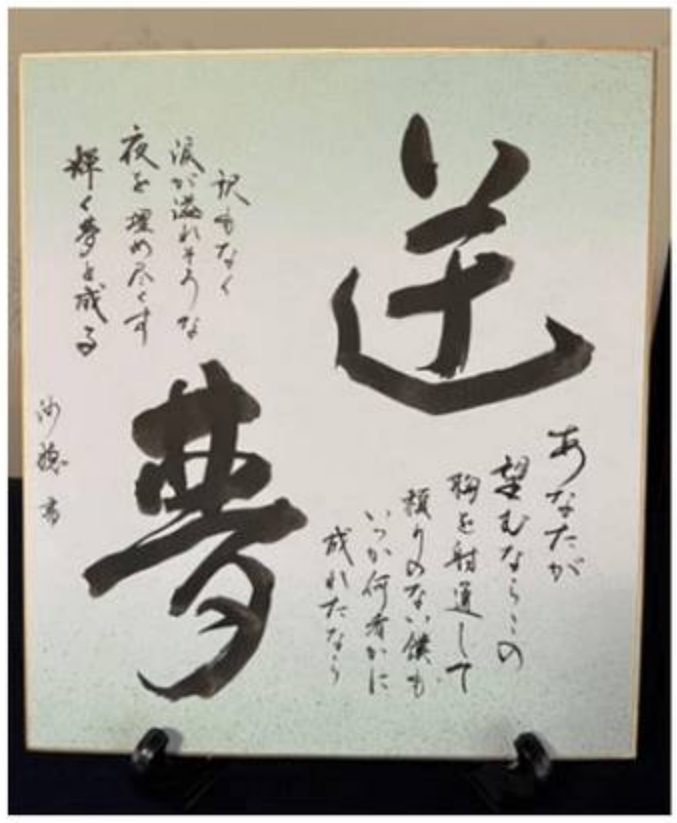


光明皇后の力強い運筆が特徴の行書作品です。この作品を書くにあたって皇后創建のお寺をいくつか巡りました。ご利益が作品に出ていれば良いのですが…。

11

大西沙穂（三回生）　色紙　創作　『逆夢』

「逆夢」



一回は創作に挑戦してみたいなと思いやってみました。

12

大林明日香（二回生）　半切　創作　『天上天下唯我独尊』

「天上天下唯我独尊」



掠れをかっこよく活かしたいと思って書きました。

13

素鴻（凌楡凱）（三回生）　全紙　創作　『自作「懐才不遇詩」並序』

「（序文略）

瓊瑤湮沙其實蒙、綺精雖有眾礫同。屈原獨醒糟醨拒、孟德居微友琴鴻。

遐境聖人明亮道、凡世鶯鳩斥巷中。中正耀世尚為沒、圖萬鯤鵬何得終。」

此作乃素鴻悵其懐才不遇思及故賢感慨甚深而作其蹈唐詩之法引先賢自春秋至近代文筆曲美書文並茂乃素鴻力作也請賞儻有共感而賜賦對其至上之悦

此の作、乃ち素鴻其の才を懐けど遇せられざるを悵(うら)み、思ひ故賢に及び、感慨甚しく深くて作せり。其れ唐詩の法を蹈(ふ)み、先賢を引ずること春秋より近代に至るなり、文筆曲美たり、書文並びて茂なり。乃ち素鴻の力作也り、請ふ賞せよ。儻(も)し共感ありて對(たい)を賦(ふ)すを賜はば其れ至上の悦びならん。



14

鈴木翔子（四回生）　半切　臨書　『臨晋祠銘』

「傅芳之跡斯在惟神誕霊周室降徳」

オンライン書展での作品を対面開催でも出品してみました。

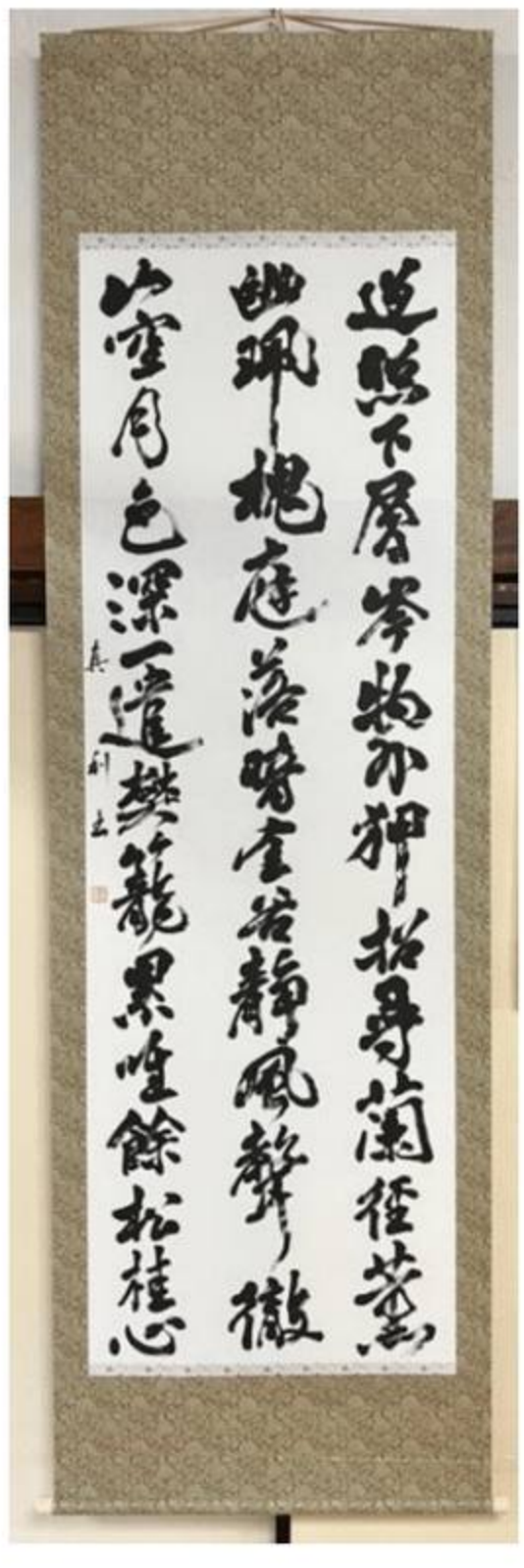


15

豊留まり（四回生）　二六　創作　『駱賓王「夏日遊山家同夏少府」』

「返照下層岑・・・」

軸サイズの創作は初挑戦です。自由すぎて大変でしたが思った以上に楽しく、頭が活性化された気がします。駱賓王は名前の格好良さで選びました。



16



中村勇真（博士一回生）　二六　創作　『葉菌詩』
「山林受用琴書鶴　天地交遊風月吾」

品格のある作品を目指して。

17



渡部裕貴（修士一回生）　半切　臨書　『臨致希声吾英友尺牘』
「竹前槐後午陰環壷領華胥屢往還雅興」

竹竹竹竹

草書作品

18



大林明日香（二回生）　半切　創作　『黄花香淡秋光老』
「黄花香淡秋光老落葉聲多夜気清」

勢いも大事ですが、冷静さも忘れたくないものです。

19



戸高海（三回生）　半切　創作　『蘇軾詩』
「人生到處知何似　応似飛鴻踏雪泥　泥上偶然留指爪　鴻飛那復計東西
老僧已死成新塔　壊壁無由見旧題　往日崎嶇還記否　路長人困蹇驢嘶」

一回生の時に書いたお気に入りの作品をせっかくの機会なので出品しました。
草書が好きという気持ちを詰め込んだ作品です！

隷書作品

20

柴田達哉（修士一回生）　半切　創作　『杜甫「絶句二首」其一』

「遲日江山麗春風花草香泥融飛燕子沙暖睡鴛鴦」



締切数日前まで何もしなかった結果、題材選び、作品制作、後片付けを二十二時間ぶっ通しでやる羽目になりました。二度とやらん。

篆書作品

21

市川拓真（修士二回生）　半切　創作　『日日是好日』

「日日是好日」



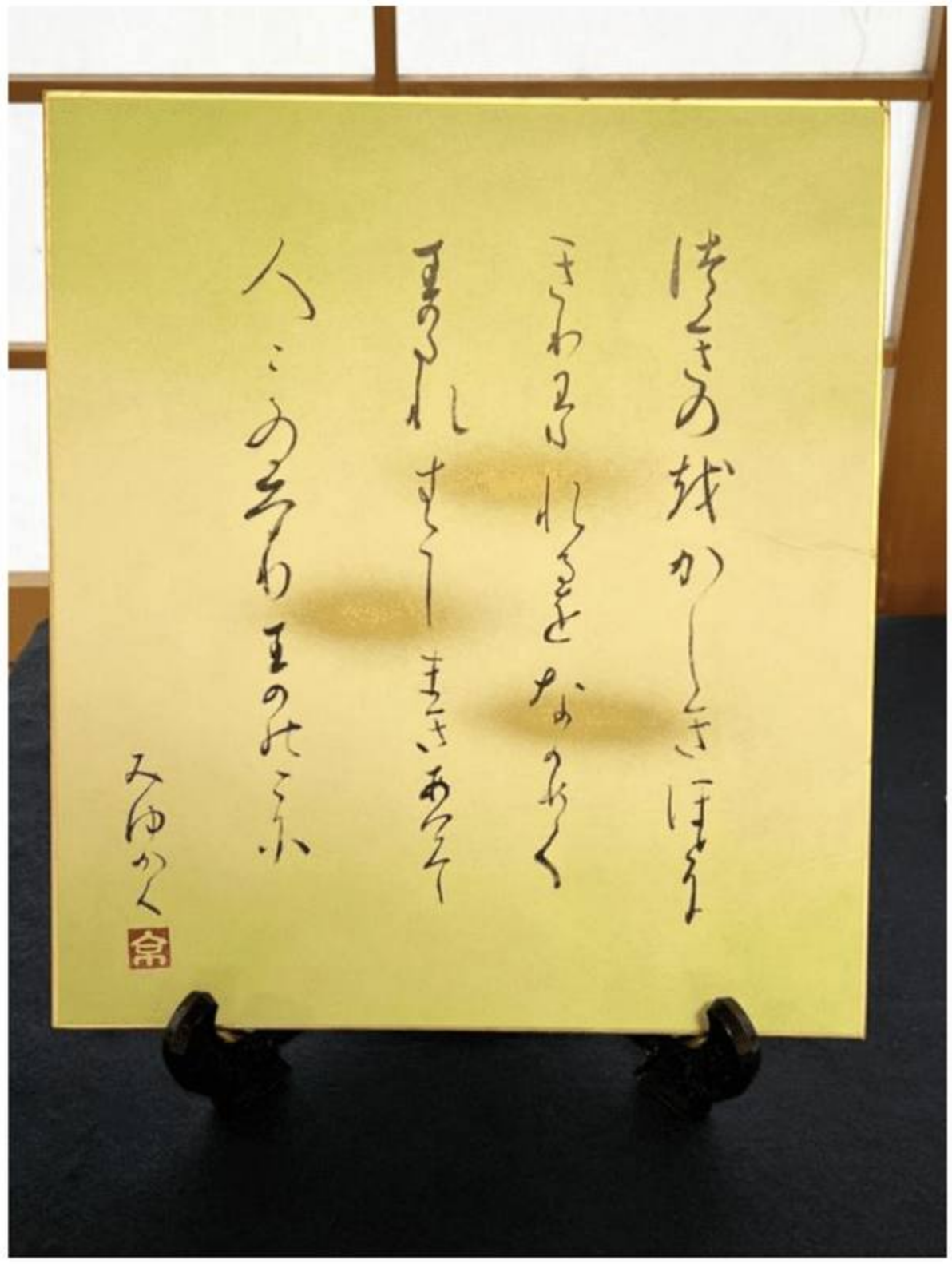
大学生活が残り一年を切ってしまったので、毎日を大切にして楽しく過ごしていきたいと思います。

仮名作品

22　木下美優（二回生）　色紙　臨書　『臨源氏物語絵巻』

「つきのをかしきほどに」

源氏物語が好きで、最近では源氏物語に関する講義を聞いてよりその面白さに魅了されているところです。今回書道でもその絵巻に取り組みたいと思い書きました。



23　岡雅博（三回生）　二六横創作　『百人一首　秋の二首』

「あらし不(ふ)く　三(み)むろ農(の)山能(の)
もみ遅(ぢ)盤(ば)八(は)多(た)徒(つ)堂(た)の川乃(の)
尓(に)志(し)き奈(な)利(り)介(け)里(り)
於(お)く夜(や)満(ま)耳(に)　紅葉不(ふ)三(み)王(わ)遣(け)
那(な)くし可(か)能(の)　こる支(き)久(く)と支(き)処(そ)
阿(あ)き盤(は)可(か)奈(な)し起(き)

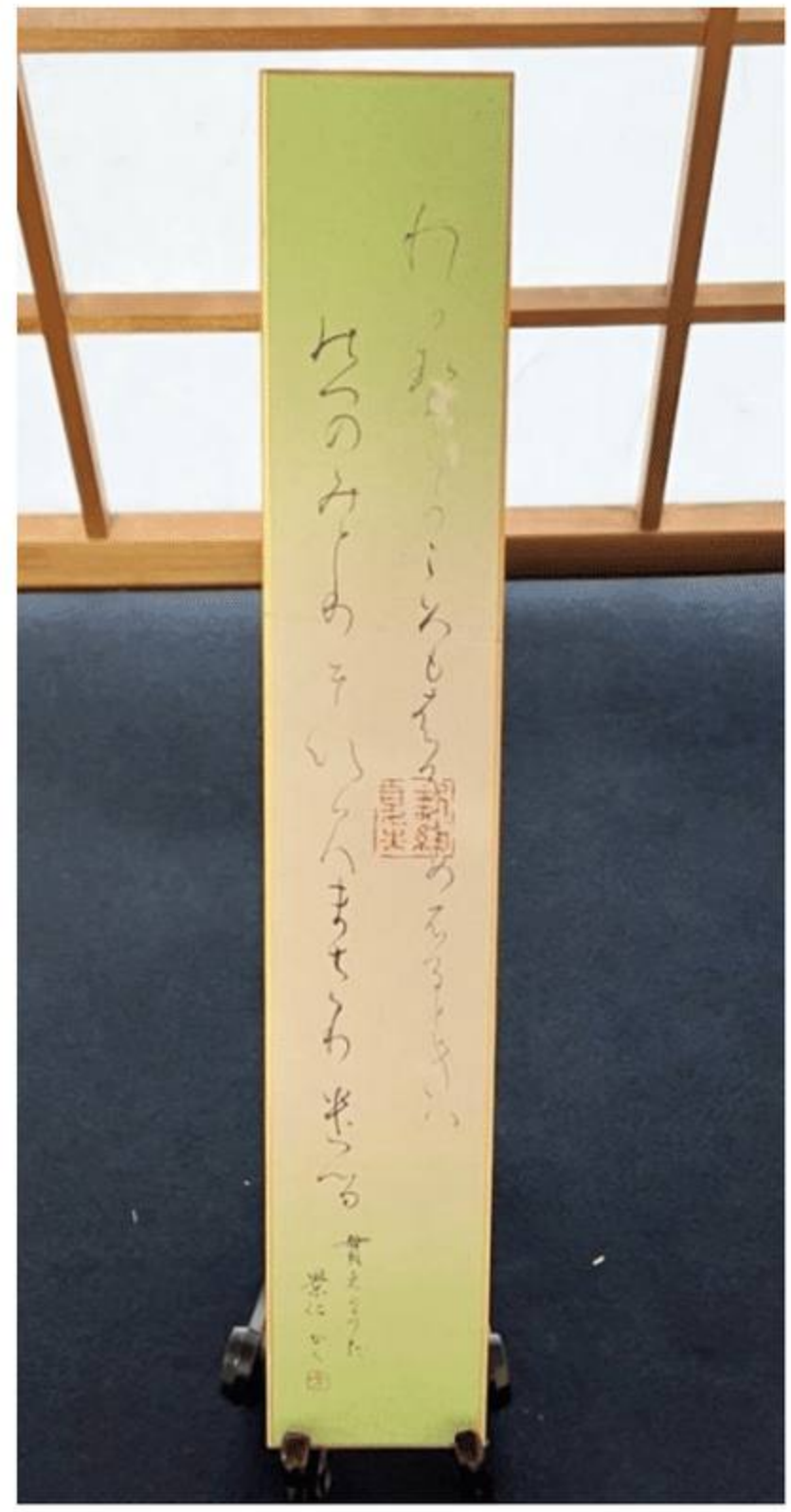
自分たちの代の書展が対面で開催でき、さらに多くの方に見ていただけるのはとてもありがたいことだなと思います。日々忙しくなる一方で、そろそろ京都で活動したいという気持ちも募っています。



24

須田光太郎（二回生）　短冊　臨書　『新緑夏を告ぐ』

「わがせこがころもはるさめふるときはのべ のみどりぞいろまさりける」



初夏をかなり意識した作品です。

25

高石京花（三回生）　半切　創作　『或人、弓射る事を習ふに』

「初心の人二つの矢を持つ事なかれ…」





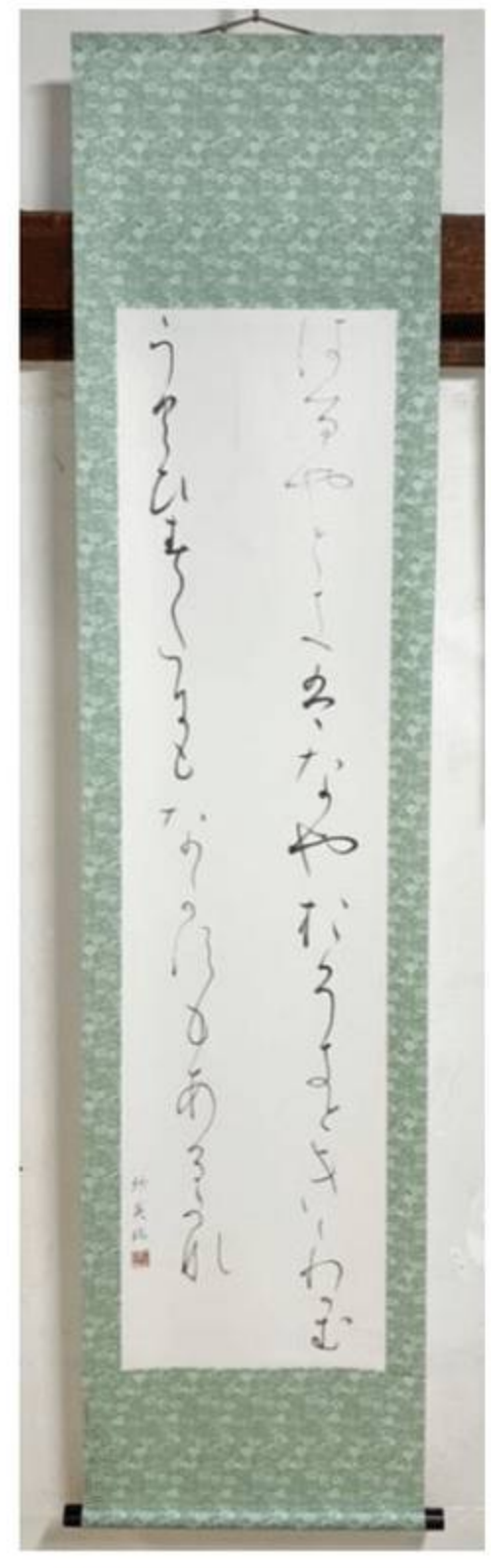
鳥獣戯画の弓のシーンに、「或人、弓射る事を習ふに」から始まる徒然草第九十二段の、師の言葉を入れてみました。散らし書きに薄墨など初めての要素が多く、想像以上に難しかったです。

26

渡辺紗英（二回生）　半切　臨書　『臨高野切第一種』

「春や疾き花や遅きと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな」

ちょっと季節外れの感はありますが……。



調和体作品

27

戸高海（三回生）　二八　創作　『燃えさかる（若山牧水の短歌』

「真昼日のひかり青きに燃えさかる炎か哀しわが若さ燃ゆ」

派手な紙を衝動買いしてしまいました。昼の輝く海を見ながらの歌ですが、内面のイメージがこの紙にぴったりだと思って書きました。



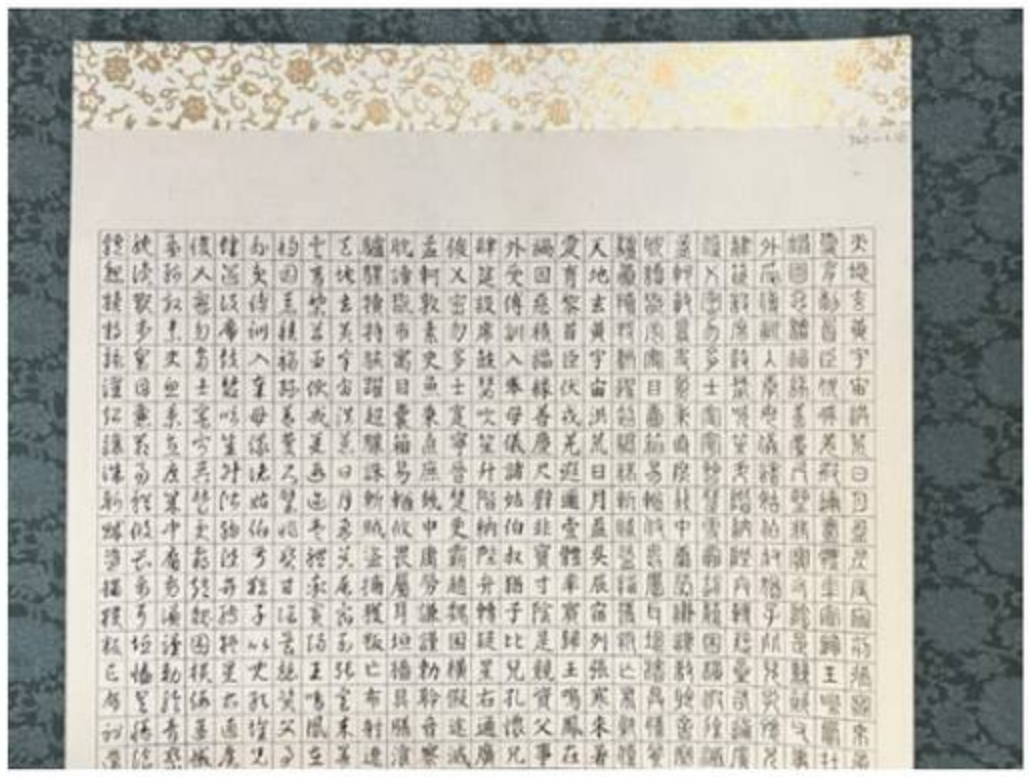
混体書作品

28

須田光太郎（二回生）　半切　臨書　『臨三体千字文』　小篆・楷書・草書

「天地玄黄宇宙洪荒……」

高三の時の作品です。元気があったなあって思います。





29

乗杉玲壽（三回生）　二八二連　創作　『古詩十九首』　草書・篆書

「行行重行行　与君生別離　相去萬余里　名在天一涯　……」

傅山の遊仙十二首の連作を参考にして書きました。去年も同じコンセプトの四連作を出品しましたが、見返すとめちゃくちゃ下手に見えたのでリベンジです。草書と篆書の対比を意識して古典っぽい感じに仕上げました。



30

橋本充史（二回生）　24.5×33（cm）　臨書　『臨顔真卿鹿脯帖』　行草

「陰寒。不審太保所苦何如。承渇已損。深慰。馳仰所撿贊猶未獲。望於文書細撿也。病妻服薬。要少鹿肉乾脯。有新好者。望惠少許。幸甚々々。尋馳謁。不次。謹狀。廿九日。刑部尚書顔真卿狀上。李太保大夫公閣下。謹空。」

忠義堂帖に収められる尺牘群から王法を垣間見るものを題材に選択し、顔真卿らしい結構に留意しつつ條暢さを加味した筆法で臨書しました。鄧石如の摹刻印二顆を附してみました。



31

吉田凌祐（修士二回生）　色紙　創作　『ＯＮＯＫＯＲＯ』　行草

「自凝」



日本神話に登場する、神々が最初に作った島を「自凝島」と言い、淡路島のあたりに比定されています。自凝（おのころ）というのは「自ずから凝り固まる」という意味です。この意味に因んで「原子核中の核子が自発的に凝集する」様子を測定しようという実験プロジェクト「ＯＮＯＫＯＲＯプロジェクト」が最近動き出しました。それを記念して、今回の作品を制作しました。

合作作品

32

乾未樹・近藤毅・関美乃・豊留まり（四回生）　全紙二分の一

創作　『弱肉京食』　行書

「弱肉京食」



合作の誘い（豊留）→「弱肉強食」提供（乾）→「強を京にするのはどう?」（近藤）→～作品制作～→京大の印押すのに失敗（関）で生まれた作品です。書いている最中とても楽しかったです。

33

戸高海・乗杉玲壽（三回生）　二八　創作　『七言詩軸』　破体書

「野花如雪繞江城　坐見年華憶帝京
閶園暁開凝碧樹　曾陪鴛鴦聽流鶯」



二人で数文字ごとに交代しながら破体書作品を書き上げました（破体というのは楷行草隷篆の五体を一作品に混ぜて書いたものことを言います）。五体と二人の書風が織り成す複雑な味わいを楽しんでいただけると嬉しいです。どちらがどの文字を書いたのか、二人の別の作品を参考にして、全部当てられた人にはお菓子をプレゼントします！（笑）

34

新入生合作

『無添　よしだ寿司　湯呑み』



一人一文字魚編の漢字を書き、それを集めて作った一、二回生の合作です。寿司屋の湯呑みをモチーフにしました。へい、お待ち!!!!!









35

全体合作
『架空看板』

新入部員に紹介したいお気に入りのお店の看板を勝手に作りました。ぜひ行ってみてください！



墨筆硯紙 書道用品一式

京都 古梅園

〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL(075)231-1531
FAX(075)231-0272

京都・書道用具店

松楳園

一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店

紙の津久間

京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL(075)371-8186(代)
FAX(075)371-8189

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ https://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町37
TEL.0742-23-5547／FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島5-14-6 クレセントビル2F
TEL.06-6458-8808／FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町164
TEL.075-251-7800／FAX.075-251-7802

LINE 公式アカウント
お得なクーポン、SALE情報の配信！
道具の豆知識を共有！得すること間違いなし。
「友だち追加」でQRコードを選択！
書道が楽しくなる！

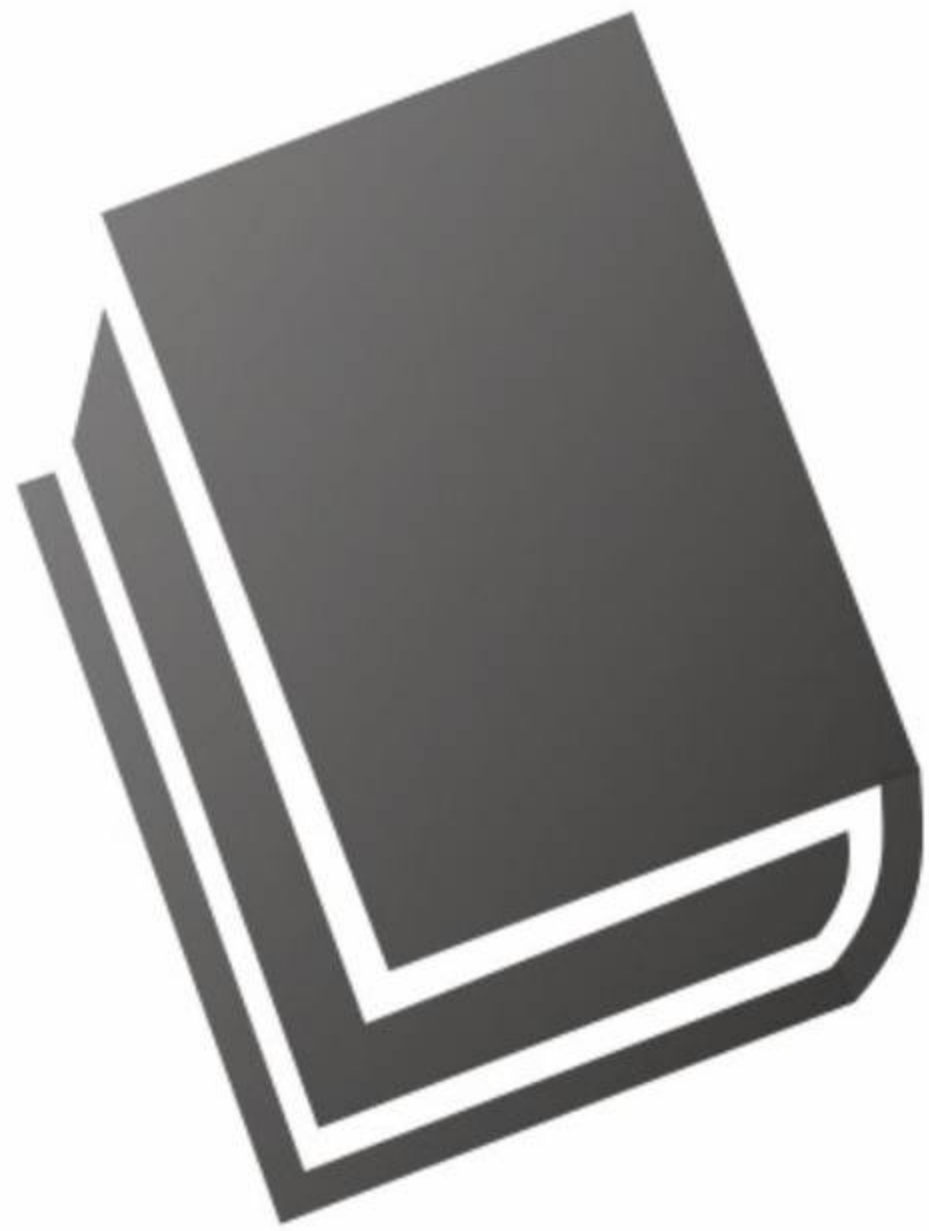
京筆・京文房

りゅうし どう
龍枝堂

〒604-0916 京都市中京区寺町二条上ル
TEL.075-252-4120 FAX.075-252-0006

ご覧いただきありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME